

東洋英和女学院

---

# 説 教 集

---

第 2 号



2019

## 表紙写真について — 礼拝堂（横浜校地） —

正面に高く掲げられた十字架、高い天井、吊り下げのライト、そして大きくとられた窓から差し込む自然光。しんとした礼拝堂に入ると、自然と背筋が伸びる、或いは大きなものに見守られているかのような思いを抱きます。横浜校地にある東洋英和女学院礼拝堂は学院内外からの多大なる支援を受け、一九九〇年七月に着工し、翌一九九一年三月末に完成、同年五月一日に献堂式が行われました。パイプオルガンは米国ノアック社製で、一九九三年一〇月に設置、同年一二月四日に奉献式・記念演奏会が行われました。日々の礼拝、クリスマス行事、コンサートなどに使用され、大学のキリスト教教育のシンボルとして大切にされています。

東洋英和女学院

---

説 教 集

---

第 2 号

2019

# 目次

巻頭言

学院宗教部長（六本木校地）

高橋 貞一郎 …………… 4

どのようなことがあっても、あなたは貴い存在

学院宗教部長（六本木校地）

高橋 貞一郎 …………… 6

なぜ怖がるのか

学院宗教部長（横浜校地）

伊勢田 奈緒 …………… 10

荒れ野の三〇年

大 学 学 長

池田 明史 …………… 14

「死にたいのなら、一人で死ねばいい」のか

大学国際社会学部  
国際社会学科教授

島 創平 …………… 18

輝き

中高部聖書科教諭

朴 洙美……………22

神さまの大きな愛

小学部教頭

岡田光弘……………26

ほんとうのゆるし

小学部教諭

佐々木喜久……………30

おいのり

東洋英和幼稚園教諭

野澤千紘……………34

喜びにあふれて

東洋英和幼稚園教諭

大木 絵梨子……………36

イエスさまの手

大学付属かえで幼稚園長

大漣知子……………40

イエスさまは私たちのために

大学付属かえで幼稚園保育主任

永瀬真澄……………44

## 巻頭言

### 節目にあつて

学院宗教部長（六本木校地）

高橋 貞二郎

主はアブラムに現れて、言われた。

「あなたの子孫にこの土地を与える。」

アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。

創世記 一二章七節

旧約聖書には、人生の節目にあつて祭壇を築き、神様を礼拝した人物が何人も出てきます。その一人は、アブラムです。彼は父親テラと一緒にハランというメソポタミアの町に住んでいました。やがてテラが天に召された後、神様はアブラム（当時は「アブラム」と呼ばれていました）に言われます。

「あなたは生まれ故郷（ちきやう） 父の家（ちちのいえ）を離れて わたしが示す地（しめすち）に行きなさい。

わたしはあなたを大いなる国民（こくみん）にし あなたを祝福（しゆくふく）し、あなたの名（な）を高（たか）める 祝福（しゆくふく）の源（みなもと）となるように。

あなたを祝福（しゆくふく）する人をわたしは祝福（しゆくふく）し あなたを呪（のろ）う者をわたしは呪（のろ）う。

地上（ちじやう）の氏族（しぞく）はすべて あなたによつて祝福（しゆくふく）に入る。」 創世記 一二章一〜三節

聖書には、その後アブラハムの思いは書かれず「アブラムは、主の言葉に従つて旅立つた」とだけ記されています。この時、彼は七五歳でした。若くないアブラハムにとつて、住み慣れたハランからの移住には、期待だけでなくいろいろの不安もあつたことかと思ひます。

アブラハムが新しい土地に足を踏み入れた時に、主は彼に現れて「あなたの子孫にこの地を与える」と言われます。この人生の節目にあつてアブラハムがしたことは、祭壇を築くこと、すなわち神様への礼拝でした。

さて、今年、東洋英和女学院にとりまして学院創立一三五周年、大学開学三〇周年という節目の年です。今まで神様が学院を守り導いてくださったことを心から感謝したいと思ひます。この節目にあつて、私たちがすべきことはなんでしょうか。それは、アブラハムのように礼拝を重んじることではないでしょうか。

学院説教集 第二号には、創刊号と同様に幼稚園から大学において礼拝時に語られてきた聖句と説教が記されています。この説教集に記される聖句と説教を通して心を神様に向けたいと思ひます。そして、どのような時にも私たちが愛し、強き御手をもつて導かれる神様を礼拝することを重んじながら共に新たな歩みを始めたいと思ひます。

どのようなことがあっても、あなたは貴い存在

学院宗教部長（六本木校地） 高橋 貞二郎

イザヤ書 四三章四節

わたしの目にあなたは価高く、貴く

わたしはあなたを愛し

あなたの身代わりとして人を与え

国々をあなたの魂の代わりとする。

子ども向けに語られているようで、大人が読んでも深く考えさせられるもの一つに童話があります。先日、ア  
ンデルセンの童話「みにくいアヒルの子」の原作を読んでいて、改めて深い話だと思われました。

「みにくいアヒルの子」の話は皆さんもよく知っていると思いますが、原作の言葉も少し加えながら紹介すると、  
次のようなストーリーです。

昔々、しげみの中で、アヒルが、巣の中で卵を温めていました。

やがて卵が一つずつ割れ、黄色くて小さな雛たちが生まれました。みんな親のアヒルに似てかわいい雛です。ところが、最後の一つの卵はなかなか雛にかえりません。

ですが、お母さんのアヒルが一生懸命温めたので、ついに雛となる日がやって来ます。大きな卵が割れると、中からは他の子どもたちとは違う灰色の大きな雛が生まれます。これが、みにくいアヒルの子です。

一緒に生まれた他の雛と大きさや色が違うみにくいアヒルの子は、どこへ行っても、そのことでひどくいじめられます。みんなからいじめられ、仲間外れにされたみにくいアヒルの子は、かわいそうに、とうとうその場から逃げ出してしまいます。

その後、他の鳥からも「君はまた、恐ろしくみつともないかつこうをしているな」と、ひどい言葉を投げかけられます。みにくいアヒルの子は、そんな周りの言葉と振る舞いによって、自分はダメな存在、みにくい存在なんだと、どんどんと自己嫌悪に陥ってしまいます。

季節が秋になった頃、みにくいアヒルの子はとても美しい白鳥の群れを目にしました。白鳥たちは真っ白な翼を飛ばたいて、あたたかい国へ飛んでいくところでした。みにくいアヒルの子は、自分も白鳥のように真っ白な翼で飛べたらどんなに幸せだろうと思います。

そうこうしているうちに、冬がやってきます。あわれなアヒルの子は、つらい冬を耐え忍ばなければなりません。でした。

やがて、厳しい冬が去り、暖かい春がやってきました。寒さから解放されたみにくいアヒルの子は、翼を飛ばたいてみました。すると、なんと体が浮き上がり大空へ飛び出すことができましたのです。

アヒルの子は夢中で羽ばたき、お堀にいる憧れたった白鳥の群れの近くに舞い降りてみました。実は、この時アヒルの子は「僕はこんなにみにくいんだから、近寄って行ったりすれば、きっと殺されてしまうだろう」と決死の覚悟で白鳥の群れに近づいたのです。

ところがどうでしょう。アヒルの子は、みんなから大歓迎されます。驚いたアヒルの子が、ふと水に映った自分の姿を見ると、そこにいるのはみにくいアヒルの子ではありませんでした。真っ白にかがやく白鳥の姿が映っていました。冬の間羽の色も変わり、美しい白鳥の姿になっていたのです。湖畔から見ていた子どもたちも「新しい白鳥が一番きれいだね」とほめます。ですが、この白鳥は、決して威張ったりはしませんでした。

これが「みにくいアヒルの子」のストーリーです。さて、この童話でよく言われるのは、人は見かけによって判断してはいけないということです。

なるほど、みにくいアヒルの子が美しい白鳥になったように、人もいつどうなるかわかりません。たとえば、その時、みじめな恰好をしていても、その後、素晴らしくなり、みんながうらやむような人になるかもしれせん。だから、人を見かけによって判断せずに大切にしない、接しなさいと言われるのです。

ですが、私はもう一つ、違うことを皆さんに言いたいと思います。それは、人は皆、神様から愛されている貴い存在であり、その価値は場所や見方によって変わることがないということです。

どこで生まれようと、他の鳥から何と言われようとも、みにくいアヒルの子は、実は「白鳥の子ども」であり、その事実は、場所や見方によって変わることはありませんでした。それと同じように、人は皆、神様から愛されている貴い存在であり、その価値は場所や見方によって変わることはありません。

今日はイザヤ書四三章四節を読みました。ここに出てくる「わたし」とは神様のことで、「あなた」とは不思議に思うかもしれませんが皆さんのことなのです。特に前半の御言葉には、どのようなことがあっても神様は皆さんを愛する貴い存在だと思っていてくださることが伝えられています。

この先、私たちは、見えるもの、数えられるものによって他人と比較されることがあるかもしれませんが。そのことによって心痛め、傷つき、悲しくなることもあるでしょう。しかし、みにくいアヒルの子は、どこに行っても、誰から何を言われようとも「白鳥の子ども」であるように、皆さんは神様から愛されている貴い存在であり、場所や人の見方によってその価値は変わることはありません。是非そのことを心に留めてもらえたらと思います。そして、どのような時にも私たちを愛してください、貴い価値のある存在として見守り続けてくださる神様が共におられることを思い、自信をもって課題や目標に最善を尽くし、チャレンジしてもらえればと思います。また、神の愛に応える日々を送ってほしいと願っています。

# なぜ怖がるのか

学院宗教部長（横浜校地）

伊勢田 奈緒

マルコによる福音書 四章四〇〜四二節

イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」弟子たちは非常に恐れて、「いつたい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

人生にはパニックがつきものかもしれません。新しい事柄にチャレンジするとき、知らない場所に行くとき、不安になることがあると思います。自分にできるかな、自分にできるはずがない、どうしようかと。

ガリラヤ湖のほとりで、群衆に対してイエス様はこの日もお話をなさっておられました。夕方になり、弟子たちはたぶん、もうそろそろ帰らなくてはと心で思っていたことでしょう。しかし、その時、イエス様が「さあ、向こう岸に渡ろう」と言われたのです。イエス様は一箇所に留まって人々を招くのではなく、ご自身が外に出て行って人々と出会うというスタイルで伝道をされていました。かつてガリラヤ湖で漁師をしていた弟子たちも、真つ暗な湖をこれから渡るの、不安だったと思います。イエス様が「さあ、向こう岸に渡ろう」と言われたとき、もと漁

師であつた弟子たちでさえも、今から行くのはちよつとと考へたかもしれません。しかし、イエス様がご一緒なら、きつと大丈夫だろうと、弟子たちはイエス様を舟に乗せて向こう岸へとこぎ出しました。暗くなりつつある湖の上を、舟は風を受けて揺さぶられながら進みました。その時、「激しい突風が起こり、舟は水をかぶつて水浸しになるほど」になつたのです。弟子たちは大変だ、このままだと舟は沈む、と、うろたえパニック状態に陥つたのです。

「おぼれてもかまわないのですか」は、私たちも何かが起こつたとき、問う言葉かもしれません。自分の領域を出て「向こう岸に渡る」というチャレンジの中で、嵐が吹くことは当然、あるでしょう。嵐の中で眠るイエス様に、弟子たちは「おぼれてもかまわないのですか」と訴えます。この「おぼれる」という言葉は、「滅びる」という意味の言葉です。眠るイエス様に「わたしたちが滅んでもいいのですか」と弟子たちは必死で訴えたのです。

イエス様は「風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた」とあります。目を覚ましたイエス様は神様に呼びかけるのではなく、ご自身が風に立ち向かわれます。そのイエス様の颯爽とした姿そのものが、今イエス様に神様が伴つておられることを証しているようです。波をかぶつて舟が沈みそうになつていて、イエス様は目の前の「水」ではなく、根本的な問題である「風」を叱りました。目の前のことに集中しがちな私たちの視点とはまったく対照的です。当時、風、息、霊は同じようなものだと考えられていたので、「風を叱る」イエス様の姿は、汚れた霊に立ち向かうイエス様の姿とも重なつていたと言えるでしょう。

イエス様は「なぜ怖がるのか」と問われます。「なぜ」という言葉に、弟子たちは「はつと」我に返つたことと思ひます。考へてみれば、そもそもイエス様の呼びかけ「さあ、向こう岸に渡ろう」から始まつた舟での移動でした。もちろん、イエス様も一緒です。自分たちは、なぜ、怖がつたのでしょうか。イエス様がおられるので、怖がる

必要などなかったのです。信頼しきれなかった弟子たちの心の中をイエス様はご存知だったのでしよう。

弟子たちの中には、つい最近までガリラヤ湖で漁師をしていた人たちもいて、湖のことはよく知っていたはずで  
す。突風や高波に悩まされた経験もあったことでしょう。彼らはその知識や経験によって、このままではおぼれて  
しまうかと判断したのです。漁師を生業としていた自分たちがそう判断したのだから、間違いはないと思っただけでし  
ょう。しかし結果から言えば、弟子たちの判断は間違っていました。イエス様の言われるとおり、「なぜ、怖がって  
いるのか」というほどの出来事でしょうかありませんでした。だからこそ、イエス様は眠っておられたのです。

緊急事態は、人の本心をあらわにするものかもしれません。突風と高波の中で、弟子たちが信じたのは、眠って  
いるイエス様ではなく、自分たちの知識や経験でした。それが彼らの本心でした。イエス様を信じてと言いな  
がらも、未だ自分を頼りにしか生きられない弟子たちの姿がありました。そのような弟子たちに、イエス様は「まだ信  
じないのか」と言われました。イエス様が共におられるならば、イエス様を信じるならば、と気付かせてくれる今  
日の聖書箇所です。

神様にお委ねする、これは神様に決めてもらう、自分は何もせずすべてを神様に任せることでは決してありま  
せん。精一杯頑張っている私たちの隣に、「もうこれ以上頑張れない」と力をおとして私たちの隣に、イエス  
様はおられるということでしょう。そして今日の聖書箇所の「向こう岸」とは、イエス様の方から「さあ、一緒  
に向こう岸に渡ろう」と呼びかけてくださるところです。自分の領域から、大きく壁を乗り越えるような気持ちで向  
かうところであるかもしれません。しかし、そんなチャレンジにイエス様は積極的に関わってくださいることも、覚  
えておきたいと思います。これから皆さんの舟はこぎ出します。数々の波が、雨が、嵐が、来るかもしれま

せん。しかし、舟を引き返すのではなく、向こう岸に向かって行きましょう。神様は共にいてくださいますから、大丈夫です。

# 荒れ野の三〇年

大学学長  
池田明史

## 申命記 八章一〜四節

今日、わたしが命じる戒めをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたたちは命を得、その数は増え、主が先祖に誓われた土地に入つて、それを取ることが出来る。

あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わつたことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きているのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によつて生きることをあなたに知らせるためであつた。この四十年の間、あなたのまとう着物は古びず、足がはれることもなかつた。

本日のタイトル「荒れ野の三〇年」は、言うまでもなく旧西ドイツの第六代大統領リヒャルト・フォン・ヴァイツェッカーの第二次世界大戦後四〇周年の記念演説「荒れ野の四〇年」をもじつたものです。ヴァイツェッカー

は、言葉の人であり、その格調高い演説によつて国内外に大きな影響をあたえました。なかでも、一九八五年五月八日に連邦議会でおこなわれたドイツ敗戦後四〇年のこの演説のつぎの一節は有名ですから、皆さんも一度は耳にしたことがあるでしょう。「歴史を変えたり、なかつたことにすることはできない。過去に目を閉ざす者は、現在に対してもやはり盲目となる。非人間的行為を心に刻もうとしない者は、また同じ危険におちいるのだ」。それだけではなく彼は、戦争をひき起したヒトラーが、偏見と憎悪をかきたてることに腐心していた事実を指摘し、ユダヤ人虐殺などをドイツ自らの過去として直視しようとはしました。そして、「若い人たちにお願ひしたい。ほかの人々に対する敵意や憎悪に駆り立てられることのないようにしていただきたい。敵対するのではなく、互いに手をとり合つて生きていくことを学んでほしい。われわれ政治家にもこのことを肝に銘じさせる諸君であつてほしい」と結んだのです。

ヴァイツゼッカーのこの演説の題名が、先程読み上げました聖書の箇所から採られているのは、よく知られています。「申命記」の「申」は、申告、申請など、「はっきり告げる」意味ですから、「申命記」は、神様の命令を「はっきり大声で告げる文書」のことです。モーセは「主が導かれたこの四〇年の荒野の旅を思い出しなさい」（申命記八章二節）という言葉を語ります。

ここでは、「主が導かれたこの四〇年」ということと、「この四〇年の荒野の旅」ということが重ねられています。まず「主に導かれたこの四〇年」とは、主である神に目を向けることでした。そして、「旅を思い出しなさい」というのは、歴史を忘れるなということにほかなりません。「四〇年の荒野の旅」は苦しかったが、それは「主が導かれたこの四〇年」だったのです。神がモーセの口を通してはっきりと告げたのは、「この四〇年の荒野の旅」

は、目を自分に向け、反省し、失敗を心に刻めということです。

さて、ここで私たちの東洋英和女学院大学のこれまでの歩みを思い起こしていただきたい。本学が開学した三〇年前、一九八九年すなわち平成元年は、いわゆるバブル景気のピークにありました。すでに日本経済の規模は、一九六八年にドイツを抜いて世界第二位となっております。振り返ってみれば、変革なしに発展できる時代は七〇年代で終わり、八〇年代は内外の情勢変化に応じて新たな発展モデルを構築していくべき時代だったはず。この東洋英和女学院も、そうした経済や社会のモデルチェンジを見据えて、短期大学から四年制大学への転換を構想したのでした。

そのような転換は、どこまで成功したと言えるのでしょうか。現実には、日本は古いモデルから脱皮しないまま、バブル景気を迎えることになりました。大多数の日本人がそれを日本の強さだと錯覚していました。しかし、一九九一年にバブル景気が崩壊します。あとに残されたのは長期にわたる停滞状況であり、社会・経済・政治の閉塞状態にほかなりません。本学が開学してから今日までの三〇年間の歩みは、平成という元号のそれと重なります。その平成の時代を象徴する言葉は、誠に遺憾ながら「停滞」と「閉塞」というネガティブなものにならざるを得ないかも知れません。果たして本学の来し方がこれらの言葉と無関係だと言い切れるかどうか、自問しなければなりません。目を自分に向け、反省し、失敗を心に刻まなければならないのです。

最後に、いま一度、ヴァイツェッカーの言葉を吟味しつつ、本日の礼拝を終えたいと思います。

「歴史を変えたり、なかったことにすることはできない。過去に目を閉ざす者は、現在に対してもやはり盲目と

なる」。

# 「死にたいのなら、一人で死ねばいい」のか

大学国際社会学部国際社会学科教授 島 創平

ルカによる福音書 一六章一九〜二六節

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たした。いものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによつて宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとすぐそばにいるラザロとが、はるかかあなたに見えた。そこで、大声で言った。「父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。」しかし、アブラハムは言った。「子よ、思い出してみてください。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があつて、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることができない。」

本日は、申しわけないが予定を変更して、つい最近起きた事件に関連して思ったことをお話しさせていただきます。  
い。

先週、皆さんもご存知のように、川崎市の登戸で、痛ましい事件が起こった。スクールバスを待っていたカリタス学園の児童と保護者の集団を男が包丁で襲いかかり、三人が死亡し、多くの負傷者を出し、犯人も自殺してしまっただけという事件である。

この事件を報道するニュース番組では、「死にたいなら一人で死ねばよい。見ず知らずの他人を巻き込むのは迷惑だ」といった論調のコメントが多く見られた。これに対して、生活困窮者を支援するNPO法人の方が、「死にたいなら一人で死ね」といった批判は差し控えてほしい。こうした発言が一部の人々をますます追い詰めてしまう」という意見を述べ、これについても賛成反対を問わず、さまざまな意見が寄せられている。一体、「死にたいなら一人で死ねばよい」という発言にはどんな問題があるのだろうか。

もちろん、この犯人の行為は断じて許されることではない。しかし、「死にたいなら一人で死ね」という発言の裏には、社会に適応できずに一人孤立している人々や、社会の周辺に追いやられた弱者―引きこもりやホームレスなど、こうした人々の存在を、我々「健常者」とは関わりのないもの―というよりもむしろ我々が関わりたくない存在とみなし、このような人々は、我々「健常者」の社会に立ち入って、一般人に迷惑をかけてほしくないという考えがあり、それゆえこうした考えが、「死にたいなら一人で勝手に死んでほしい。我々無関係な人間を巻き込むな」というコメントに繋がるのではないだろうか。

本日取り上げた「金持ちとラザロの話」は、いろいろと問題のある譬え話である。なぜ物乞いのラザロが死後慰

められるのに対し、金持ちは「金持ちである」という理由だけで、死後陰府で苦しまなければならないのだろうか、金持ちの何が罪なのだろうか。

まずこの話で注目すべきことは、ここでは金持ちの方は単に「ある金持ち」と呼ばれているのに、物乞いの方は「ラザロ」という固有名詞で呼ばれていることである。すなわちここでは、一般的な社会的価値観とは反対に、金持ちや権力者ではなく、この世の人々に軽視され無視される傾向にある、社会の最底辺にある人たちを、一人の間として特に重視するイエスの姿勢が見られると思う。

次に、ラザロと「金持ち」を比較すると、「ラザロは」その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた（ルカによる福音書一六章二一節）」とあるように、ラザロは、「金持ち」の助けを必要とし、それを願っているのに対し、「金持ち」の方はラザロには全く気付いていない。すなわち、ラザロのような立場にある弱い人たち、社会の最底辺におかれた無力な人たちは、常に隣人を必要とし、隣人を求めているのに対し、この世の権力者や金持ちは、彼ら自身で自立しており、自己充足しているゆえに、隣人を必要とせず、隣人を求めることもしない。それゆえ彼らは、真に彼らの助けを必要としている者たちに気付かず、彼らを見ようともしない。ここに「金持ち」の問題がある。

我々は今回の事件を、我々とは全く無関係の問題と考えるのではなく、我々自身の問題として、改めて考え直す必要があるのではないだろうか。今回の事件は、そういう意味で「隣人を自分のように愛せ」という掟の真の意味を問い直すきっかけともなったのではないだろうか。



# 輝き

中高部聖書科教諭

朴 洙 美

## へブライ人への手紙 一 二章 一 一節

およそ鍛錬たしれんというものは、当座とうざは喜ばよろこしいものではなく、悲かなしいものと思おもわれるのですが、後あとになるとそれで鍛え上げあられた人々ひとびとに、義ぎという平和へいわに満みちた実みを結むすばせるのです。

突然ですが、皆さんに思い出してほしいことがあります。それは「うれしい」と思ったことです。最近「うれしい」と思ったことはありませんか。どれぐらい「うれしかった」ことが思い出せますか。

日々の生活の中では、楽しくうれしいこともあれば、そうでないこともあります。しかし、不思議なことに、人間はうれしいことや、楽しかったことよりも、辛くて苦しかった嫌なことを覚えておく傾向があるそうです。特に、季節の代わりの目であるこの時期は、暑さに慣れていない体はだるく疲れやすいので、気持ちが落ち込んだり、いらっとしたり、物事を否定的に考えやすいものです。

さて、過去の辛かったことや今の苦しいことは、単に嫌な思い出ということが終わってしまうのでしょうか。

このことを真珠とダイヤモンドの話をもつて考えてみましょう。

まず、真珠の話です。真珠を作る真珠貝がありますが、砂の中で生息している真珠貝は、海水と一緒に砂や泥を吸い込みます。そういう異物が入ると貝は嫌がって吐き出そうとします。尖った石のかげらなどが入ってくると、貝は痛いので、頑張つて吐き出そうとしますが、どうしても吐き出せない時があるそうです。そんな時、貝はその異物を体の中に入れてそのままにしておくしかありません。痛みを耐えながらも、異物によって内蔵を傷められないように、体を覆っている膜が異物を包み込みます。長い年月をかけてその異物を幾重にも幾重にも包み込み、そうして出来るのが、真珠だそうです。

次は、ダイヤモンドの話です。

ダイヤモンドと言えば、輝きです。ダイヤモンドの輝きには三種類があります。シンチレーションというチカチカとした輝きで、表面反射によるもの。ブリリアンシーという、白く強いきらめき。そして、ディスパーションという、虹色の輝きです。これはダイヤモンド内部に入った光が反射を繰り返して、プリズム効果によって虹色となったものです。このような輝きはカットされた面によって生じるものです。ダイヤモンドの輝きやきらめきを決定づける一番大切な要素はカットだそうです。カットが、ダイヤモンドが生まれ持った美しさを引き立てるのです。

しかし、ダイヤモンドは他の物質に比べてとても堅いものです。なので、ダイヤモンドをカットするためにはダイヤモンドを使います。切られ、削られ、何度もカットすることによってその輝きは増していきます。

ここで真珠とダイヤモンドの例を踏まえて、過去の辛かったことや今の苦しいことについて考えてみたいと思います。貝が砂や虫のような異物を吐き出すように、さまざまな問題を乗り越えることもあれば、なかなか吐き出せ

ないこともあります。「周りの人は普通にできることが私にはできない」とか、「他の人には起こらないような出来事がなぜ私だけに起こるのだろう」と思えるような、理解できない、解決のできない問題です。しかし、その抱えている問題こそ、自分自身を成長させているのかもしれない。

またダイヤモンドは同じダイヤモンドにしかカットできないように、人は多くの場合、人間関係の問題によって心が傷つきます。その苦しさ、恥ずかしさ、辛さは、思い出したくない単なる傷に過ぎないのでしょうか。むしろ自分も気づかないうちにその傷によって自分の人生は輝くことができるのではないのでしょうか。ダイヤモンドのカットのように何度もカットされ、その分輝きも増していくでしょう。

しかし、真珠もダイヤモンドも真つ暗なところでは輝きません。光に当たった時に輝きます。

私たちは神の愛という光に照らされ輝きます。神の愛の光、それは神様が人に与えたり、与えなかつたりするものではなく、いつも変わりなく私たちの上に注がれています。

しかし、なぜかその光が注がれていない気がするときがあります。どうしたら、その愛の光に照らされることができるのでしょうか。それは、私たちが心を開き、神の愛を受け入れればよいのです。つまり、神を信頼し、信じの信仰です。今日の聖書箇所前の章である一章では旧約聖書の人々の信仰を紹介しています。もし、「分厚い旧約聖書を最初から読むのは大変だな」と思う人がいたら、まずヘブライ人への手紙一章を読むことをお勧めします。旧約聖書のたくさんの人が目の前の苦しさの中でも神様を信頼し、信じることで苦難に向き合ったことが簡潔に記されています。

そして、「私は旧約の人々のように信じることはできないなあ」と思うなら、この方を思い起こしましょう。先

にお読みしたへブライ人への手紙一二章の二、三節を皆で読みましょう。

「信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないうで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように、御自身に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい」

神様が私たちに注いでくださる愛、その光は消えることのない、永遠の命、イエス・キリストです。この方イエス・キリストのことをよく考え、受け入れてみませんか。過去の試練も、今の辛さがイエス・キリストという光に当てられると、慰められ、励まされていくのです。

およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。

# 神さまの大きな愛

小学部教頭  
岡田光弘

イザヤ書 四〇章八節

草は枯れ、花はしぼむが

わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。

「先生、おはようございます。はい、これプレゼント」。毎朝、昇降口の外で皆さんの登校を見守っていると、時々プレゼントをくれる人がいます。ほとんどが、登校途中に拾った花や葉っぱや木の実です。時には、折り紙で折ったものをくれる人もいます。もらったときは、何でも「嬉しいな」と感じます。

また、月曜日や火曜日には、お教室に飾る花束を持って来る人がいます。どれも綺麗で、思わず笑顔になってしまいます。

秋の花には、秋桜、薔薇、カーネーション、ダリア、サルビア、オシロイバナ、彼岸花、百日紅（サルズベリ）、桔梗、菊などがありますね。少し前は、街中を歩いていて、金木犀の花の香りがすると「秋になったなあ」と感じ

ていました。

これからは、冬の花のデイジーやクリスマスローズ、水仙なども見られると思います。もうそろそろ、シクラメンやポインセチアのような鉢植えの花が登場してくるでしょう。シクラメンやポインセチアを見ると、クリスマスが近づいてきたなあと感じてしまいます。

教室が花で飾られていると、気持ちも和らいだり、ホッとしたりしますね。

また、校庭の花壇には、季節ごとに園芸委員会の皆さんが綺麗に花を植え、手入れをしてくださっていますね。綺麗な花が校庭にあると、とつても明るく鮮やかな感じがして、先生は好きです。

でも、どんなにきちんと水やりをしたり上手に手入れをしたりしても、花は時間が経つと枯れてしまいますね。

また、秋の遠足や修学旅行中でも見かけたと思いますが、野に咲いている花は、誰かが水をまいたり、肥料を与えられたりして育つのではなく、人間が何もしない状態でも花を咲かすことができます。でも、少しずつ元気がなくなり、やがては枯れてしまいます。

とつてもはかない命です。はかないとは、消えやすく、長続きしないことです。

そして、人間も、はかないのです。

聖書の中には、人間も草花と同じようにはかかないと、沢山書かれています。しかし聖書では、悲しいこととして「人の世のはかなさ」が出てくるのではなく、むしろそれと比べて、決して変わらないものがあることを教えています。「草は枯れ、花はしぼむ、しかし神の言葉はいつまでも変わることがない」ということです。

人間も年を取ると少しずつ衰え、弱っていきます。先生も最近、細かい文字が見えにくくなってきて、

眼鏡をかけることが多くなりました。

この眼鏡は、皆さんがかける眼鏡とは違って、近くのものによく見えますが、遠くのものによく見えない眼鏡、そう、老眼鏡です。まだ若い皆さんには、感じることはないことですが、それが人間の現実なのです。人は年と共に、草や木と同じように老いて（弱って）いきますが、どんなに弱っても変わらないものがあります。それが、神さまの言葉です。

人間は、毎日の生活の中で、喜んだり、悲しんだり、疲れてしまったり、傷ついてしまったりするとても弱い存在です。それは、まるで風に揺らぐ草原の草花のようでもあり、やがて枯れてしぼんでいく野の花のようなものもあります。

しかし、草や野の花のようなものにすぎない人間を、神さまは生命を与えて生かしてください。神さまの言葉が人を生かし、神さまの言葉は永遠に変わることがないのです。

聖書の中に、「人の命は尽きてもそれがすべての終わりではない」という言葉があります。永遠に変わらない神さまの存在と神さまの言葉に、わたしたちは、大きな希望が与えられます。パウロさんが仰ったように、「見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続する」のです。

創世記一章二七節に「神は御自分にかたどって人を創造された」と書かれています。神さまは、人間を大切な存在として、神さまに似た形で命を与えてくださっているのです。

注意して花を見てみると、同じ種類の花でも一つとして同じものはありません。少しずつ違いがあるのです。皆さんも似ているようでも少しずつ肌の色も形も違いますよね。違っているからこそ、良さがあります。一人ひとり

に与えられた違いをお互いに認め合い、大切にすることで、お互いの良さがもつともつと生かされます。

変わることに神さまの言葉は、神さまを信じることによつて受け入れられます。

今日も、神さまの言葉を信じて生活できますようにと、願っています。

# ほんとうのゆるし

小学部教諭

佐々木 喜久

ルカによる福音書 七章四八節

そして、イエスは女に、「あなたの罪は赦された」と言われた。

シモンさんは大変勉強が好きで、決まりや法律のことなど大変よく知っていました。更には、沢山の決まりをしつかりと守っていて、とても真面目でした。シモンさんは、ファリサイ派というエリートの子供でもありません。いつも正しいことをするように心がけていたのです。

ナザレから出た新しい先生についてもっと知りたいと考えました。この先生とはいったい誰でしょうか。そうですね、イエスさまですね。

ある日のことです。シモンさんはイエスさまのお話が聞きたくて、イエスさまを食事に招くことにしました。そしてイエスさまがどんなお話をするのか自分の目で確かめてみようと思ったのです。

シモンさんの家はとても大きくて広く、家には中庭があり、そこはとても涼しくて、気持ちがよく、噴水まであ

りました。外の通りからも中庭へは簡単に入ることができるようなそんな家でした。

シモンさんの家にイエスさまが食事に来るということを知って、他にも沢山のお客さんが来て食卓についていました。テーブルには沢山のご馳走が並んでいました。

イエスさまは食卓についてお客さんに、お話をしています。

通りからイエスさまのお話を聞こうと、そっと忍び込んで、木や物の影からイエスさまのお話を聞いている人もいました。シモンさんはそんな招待していないお客さんたちの様子も見ていました。忍び込んできた、招いていないお客さんたちをじつと見ていたシモンさんは、一人の女の人を見つけた時、怒りがこみ上げてきました。

その女の人は町でも評判の悪い女の人だったからです。シモンさんは、あんな悪い女の人はここから出て行ってもらいたいと思いました。シモンさんがその女の人を見ていると、その人は、そっとすわっているイエスさまのそばまで行って、ひざまずきました。そして自分の持ってきた大変高い値段の香水をイエスさまの足にふりかけました。その後、その人はぼろぼろと涙をこぼしてイエスさまの足をぬらしました。そして、何と、その涙でぬらした、イエスさまの足を自分の髪の毛で拭いたのです。そしてその足に口付けをしたのです。

シモンさんはその様子を見ているうちに、はらがたつて、むかむかしてきました。

イエスさまは何でも分かっている、預言者のようにお話をしたり、偉そうなことを言ったりするけど、あの女の人が悪い人だと見抜けないなんておかしい。悪い人なのだから、すぐにこの家から追い出してくださいとそう信じていました。

イエスさまは、そんなシモンさんの心の中身が分かっていました。シモンさんの顔をじつと見つめてこう言いま

した。

「シモンよ、二人の男が、金貸しからお金を借りていました。一人は金貨を五〇〇枚、もう一人はたったの五〇枚。二人とも何かの理由でお金が返せなくなったとき、この金貸しは、二人の借金を無条件でゆるしました。二人のうち、どちらが金貸しに多くの愛と感謝を持つと思いますか」。するとシモンさんは、

「大金をゆるしてもらった男だと思えます」

と答えました。イエスさまは、

「その通りです。私があなたの家に着いたとき、あなたは足を洗う水を出してくれませんでした。でも、この女の人は、私の足を涙で拭いてくれました。あなたは、私を歓迎して抱きしめてくれましたでしたが、その女の人は、私の足に口付けをして、しかも高価な香油を注いでくれました。その人は、自分がどれほど多くゆるされたかを知っているのです、このような愛を示したのです。神さまのゆるしを必要と思わない人には感謝も愛も示しません」と言われました。それからイエスさまは涙でぬれた女の人に、

「あなたの罪はゆるされました」

と、おっしゃったのです。周りの人たちはざわめきました。何であんな悪い女の人がゆるされるのかと。しかし、イエスさまは、さらに女の人に言いました。

「行って、平安な生活をしなさい。私へのあなたの信仰が、あなたを救ったのです」。



# おいのり

東洋英和幼稚園教諭

野澤千紘

テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 五章一七節

絶えず祈りなさい。

神さまは子どもたち、お父さまやお母さま、先生たち、みんなのお父さんです。ですから、お祈りの初めに、「天の父なる神さま」とか「天のお父さま」とか、「大好きな天のお父さま」と呼びかけてから、聞いてほしいことをお話しますね。

子どもたちはどんな時にお祈りするかしら。

教会で、お家で、幼稚園で。嬉しい時、困っている時……。

それぞれ、違う場所やいろいろな気持ちでお祈りしますね。

先生がみんなと同じくらい小さい子どもの時、お母さんが熱で寝ていました。「大丈夫かな」「お水もつてきたよ」と心配していると、お母さんは、具合が悪いのに「早く元気になるからね」、「心配かけてごめんね」と私に言って

くれました。私は、「大丈夫よ。いっぱい寝て、早く元気になってね」と伝え、お母さんが寝ている近くで、静かに遊んで過ごしました。本当は、早く元気にならないかな、と悲しくて寂しい気持ちでたまりませんでした。何か絵本でも読もうと思つて絵本を取りに行ったとき、教会で見たことのある絵本を見つけました。この絵本です。見てみると、家族の絵や食事の時の絵など、いろいろありました。その中に、具合が悪くて寝ている子どもの頭をそつとなでているお母さんの絵がありました。それを見て、「そうだ」と思つて、私は、「神さま、お母さんの病気を早く治してください。お願いします。アーメン」とお祈りしました。

自分の心にあることをそのままお祈りしてよいと聖書に書かれています。

お祈りの最後は、「イエスさまのお名前によつて」「イエスさまの御名を通して」と言いますね。それは、聖書にイエスさまがそう言われたからです。

「アーメン」は「そのとおり本当です」という意味です。心から私はお祈りしました。お祈りを聞いてくださつて、神さま、ありがとうございますという気持ちです。

神さまは、いつも私たちのお祈りを聞いて応えてくださいます。お祈りの中で、お願いしたのに、その通りにならないこともあります。願ひ通りにならなくても神さまは私たちに一番良い方法で応えてくださるのです。ですから、安心してお祈りしてよいのです。

参照 船本弘毅（文）、木下惇子（絵）『こどものいのり』（日本基督教団出版局）

# 喜びにあふれて

東洋英和幼稚園教諭

大木 絵梨子

## マタイによる福音書 二章九〜一一節

彼らが王の言葉聞いて出かけると、東方で見た星が先立つて進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼はひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

イエスさまがお生まれになったとき、空には不思議な星が輝いていました。

それを遠い東の国の星に詳しい博士たちが見つけ、「あの星は一体なんなのだろうか」と調べました。すると、その星は神さまが新しい世界の王さまをくださったことを伝えているのがわかりました。博士たちは王さまにお会いしたい気持ちになりました。さっそく旅の支度をし、星を目指して進んでいきました。遠い国からベツレヘムまではとても大変な道のりだったと思います。それでも博士たちは、生まれてきた王さまにお会いしたいという強い気持ちで前へ前へ進んでいきました。やがて博士たちはエルサレムというところに到着しました。エルサレムには

大きなお城がありましたので、博士たちはそこで新しい王さまが生まれたのかと思ひへロデという王さまに会いに行きました。

「新しい王さまはどこにいらつしやいますか」と博士たちは聞きました。これを聞いたへロデ王は新しい王さまが生まれたら、自分は王さまでいられなくなるだろうと不安になりました。そこでへロデ王は、博士たちに「新しい王さまが見つかったら私に知らせてくれないか。私も新しい王となられる方にお会いしたいのだ」と言い、博士たちをベツレヘムへ送り出しました。ところがへロデ王は新しい王さまにお会いしたいと言いましたが、本当は新しい王さまなんて殺してしまおうと考えていました。

博士たちが遠い遠い砂漠を越えて進んでいくと、そのとき空に輝く星が、馬小屋で止まりました。博士たちはほんなに喜んだことでしょうか。

中に入るとヨセフとマリア、そして飼い葉おけの中には赤ちゃんがすやすやと眠っていました。博士たちは赤ちゃんである神の子イエスさまを拝みました。そして、大切に持ってきた黄金、乳香、もつ薬の宝物をイエスさまにお捧げしました。この宝物は博士たちの仕事で使う大切な道具です。この道具がないと仕事はもうできませんが、それよりも、イエスさまにお捧げせずにはいられなくなったのですね。

そしてその夜博士たちは夢を見ました。それはへロデ王のところに戻ってはいけないというお知らせの夢でした。博士たちはそのお知らせ通り、帰りはへロデ王のところに行かず、別の道を通って帰っていきました。

博士たちの前に羊飼いのイエスさまにお会いしに行きましたが、新しい王さまがお生まれになったのに、お会いしたのは羊飼いと博士たちだけでした。さんびか「ひかる星にみちびかれて」でも最後に、「飼い葉おけの赤ちゃん

んが御子とは誰も知らない」というところがあります。救い主が来ることを昔からずっと人々は待っていたのに、生まれたときは赤ちゃんが新しい王さまとはほかに誰も知らなかったのですね。

参照　さんびか「ひかる星にみちびかれて」（メキシコのカロル、奥山正夫日本語詞）（エム・エム・オー企画  
音楽事務所『クリスマスうた《聖歌名曲シリーズ三》』より）



# イエスさまの手

大学付属かえで幼稚園長

大 漣 知 子

マルコによる福音書 一 二章三二節

「隣人を自分のように愛しなさい。」

〔参考聖句〕

マタイによる福音書 一九章一五節

そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。

ヨハネによる福音書 一 三章五節

それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。

ここにいる子どもたちは、もうすぐ一年生になります。幼稚園に入った頃に比べると、神さまとイエスさまに愛されて心も体もずいぶん大きく育てられました。今日は私が幼稚園に入った時のお話から始めますね。

四歳の時、私は教会の幼稚園に入園し、ゆり組の子どもになりました。それまでいつもお母さんと一緒にいたのに、幼稚園では別れなくてはなりません。お母さんが一緒にいないと心配だった私は、毎朝入口で「幼稚園はいやー」と大きな声で泣きました。何日も何日も同じように泣いて怒って庭に飛び出しました。すると毎日毎日先生がそばに寄ってきて、そつと手をつないでくださいました。先生は、私の手をにぎって「お母さんがいないのは、寂しいね。泣きたいね」と言いました。その後いつも「知子ちゃんに良いことを教えるわね。お母さんがそばにいない時にも、神さまとイエスさまと一緒にいてくださるのよ。だから、いつでもどこでも、ひとりぼっちではないのよ」と話してくださいました。

四歳の私には、目に見えない神さま・イエスさまのことはよくわからなかったでしょう。でもずーっと手をつないでいてくださった先生が、何度も「イエスさまがいっしょ」と言ってくださいたことは覚えています。そして先生の手がとてもやわらかかったことも覚えていきます。

四月が終わって五月になった頃、私は朝お母さんと「バイバイ」する時に、泣かなくなりました。手をつないでくれる先生がいて、その先生が教えてくださる神さま・イエスさまが守っていてくださると思えるようになったからだと思います。

幼稚園では、ここにいる子どもたちと同じように礼拝をし、イエスさまのお話を何度も何度も聴きました。寂しい人の友だちになり、病氣の人を治し、子どもたち一人ひとりを愛してください、お弟子さんの足を洗ってください

るイエスさま。間違ったことをしてしまふ私たちをゆるして正しいことができるようにと力をくださるイエスさまを知りました。イエスさまは、私のことも愛してくださいと知り、イエスさまがいてくださることがとても嬉しいことになりました。目には見えないけれど、いつも私の手をつないでくださるよう感じながら、大きくなっていくことができました。ここに一人ひとりのことも、イエスさまは知っていて、愛してくださいます。

イエスさまの言われた「隣人を自分のように愛しなさい」というおことばを知っていますね。私も小さい時から知っていました。知っていたけれど、私には、隣人―友だちや家族や周りにいる人を愛するよりも、自分のことばかりを大事にしてしまうことがたくさんありました。困っていたり寂しそうにしているお友だちがいても「大丈夫」と自分から手をのばしたり手をつないであげる勇気がなかったし、自分のしたいことがあるとそのことに心も手も動かし、困っている人に気づいていても知らんぷりしてしまったこともありました。

隣人を自分のように大切にすることは難しいことです。とても難しいことです。でも、イエスさまが私たちを助けてくださっています。イエスさまは、人を愛するために心と一緒に手を動かし手を使ってくださいました。イエスさまのおことばと、イエスさまのなさったことが、私たちにどうすれば隣人を愛することができるか、どうすればこの手が愛する手になれるかを教えてくださいます。

四歳の時に毎日私の手をつないでくださった先生も、イエスさまに助けられてイエスさまのように私を愛してくださいったのだと思います。

今私は、ここにいるみんなが、神さまとイエスさまに愛されながら、自分のためにも誰かのためにも心と手を使っ

ていけますようにと願っています。

何もできないと思った時にも私たちにできることがありますよ。それはこの右手と左手を合わせて「友だちを守ってください」「家族を助けてください」と誰かのためにお祈りすることです。

# イエスさまは私たちのために

大学付属かえで幼稚園保育主任

永瀬真澄

マタイによる福音書 二八章六節

あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なされたのだ。

\*ある年、幼稚園の木にかけた巣箱にシジュウカラが卵を産みました。

子どもたちは親鳥が巣作りをする姿から見えていました。そしてひな鳥がかえってからは親鳥が餌を運ぶ様子などを見つけていました。しかし、ある朝大きな鳥が巣箱の中のひな鳥を襲いました。その時の親鳥の姿が私の心に強く残りました。

四歳児クラスのイースター礼拝を担当することになった私は、進級したばかりの子どもたちにイエスさまの十字架の死とよみがえりをどのように話したらいいかと考え、シジュウカラの話を通して子どもたちにイエスさまが私たちのために命をかけて死なれ、よみがえられたことを伝えることにしました。

今日はイースターです。イースターがどのような日なのかを考えた時に思い出した鳥のお話をします。

ある時、幼稚園の庭の木に付けてある巣箱に小さな鳥が卵を産みました。調べてみるとシジュウカラという鳥でした。巣箱の穴からシジュウカラのお父さんがちよこんと顔を出し、飛び立ったり、また戻ってきたりしていました。中ではお母さん鳥が卵を温めていました。お父さん鳥はエサを探してあちらこちらに飛び回っていたのでしよう。

やがて卵がかえって三羽の赤ちゃん鳥、ひなが生まれました。お父さんとお母さんは大忙しです。お腹が空いている赤ちゃん鳥に朝から夕方までエサを探し、運び続けていました。赤ちゃん鳥はすくすくと大きくなっていき、時々巣箱の穴から顔をのぞかせるようになりました。

ところが、ある朝、シジュウカラの巣のそばの枝に大きな尾っぽの長い鳥がとまりました。どうやら赤ちゃん鳥を狙っているようです。お父さんはエサを探しに行っています。お母さんは一生懸命大きな鳥を追い払おうとしていました。大きな鳥はとがたくちばしでお母さん鳥をつついて巣からどかさうとしますが、お母さん鳥はどきません。何回も何回も大きな鳥はお母さん鳥をつつきました。やがて大きな鳥はあきらめて飛んで行ってしまいました。

赤ちゃん鳥は守られました。お母さん鳥はどうなったでしょう。

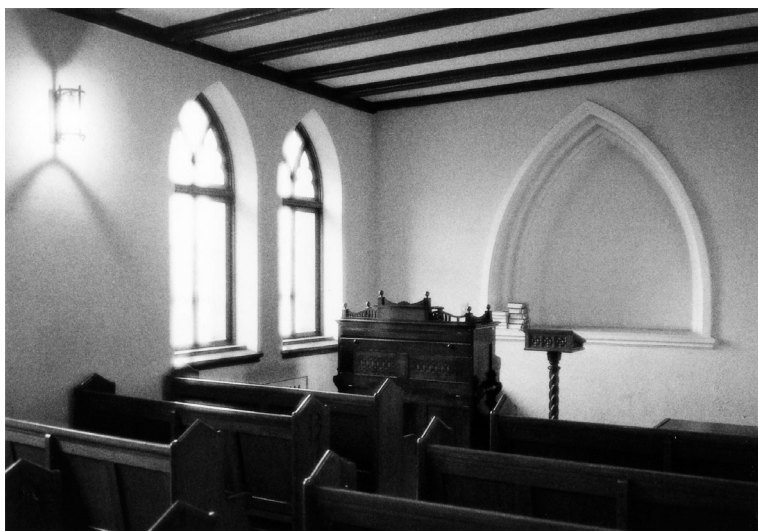
お母さん鳥は大きな鳥につつかれ、傷つき、死んでしまいました。

イエスさまは、このお母さん鳥が子どもを守ったように、私たちを救うために代わりに死んでくださいました。このお母さん鳥は死んでしまいましたが、イエスさまは一度死なれてから三日目によみがえられ、今も私たちといっ

しよにいてくださいます。

救い主イエスさまが共にいて守ってくださいることを覚え、感謝し礼拝をする日がイースターです。





中高部旧校舎チャペル（1933年竣工、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計）

東洋英和女学院 説教集 第二号

発行日 二〇一九年一月六日

編集 宗教教育委員会

発行 学校法人東洋英和女学院

東京都港区六本木五丁目一四番四〇号

☎〇三・三五八三・三三二五

